

主基節會
悠紀節會

同 斷

主基節會

解 齋

豐明節會

新嘗會 是は來去の年始より被行也。

以上

一、穗拔使 御酒米。近江國丹波國・兩國に相定。其村へ御所より御使立事也。

八月二十九日未明、洛西紙屋川東賀茂川清し荒神口。

勅 使 烏丸大納言 諸人并見不成様に、霧にて武家警固もあり。

右は白川・秋原兩家も御供にて、御祓の様に御沙汰までに候。

七月二十八日、天赦日於朝廷節會あり。是大嘗會事始の品と申事也。

當 職 一條關白殿下執達也

十月六日、伊勢兩宮への勅使發駕。

口上の覺

一、御築地の内僧尼并法鉢の輩往反停止之事。但其形俗鉢にこしらへ候て、隱便に往反の分は不可苦事。一、同不淨の輩往反停止の事。一、火之用心の儀常々可被仰付候得共、此節別て可被入御念事。

右之趣爲御心得各方迄可申入の旨、兩傳御申付如御座候。尤御攝家様方諸大夫中へも御傳達可被成候。以上。

十月二十六日

葉室家 雜掌

冷泉家 雜掌

關白様

諸大夫衆中

一、十月二十九日より御神事中、寺方朝夕の鐘其外鉦鼓共に禁裡より、上京は町端迄、下京は四條通を限り、東は山の根を限り、西は千本通を限り、此内の寺方鐘うち候儀、御停止に候事。

來月就大嘗會、來る二十九日朝到來月中御神事に候事。

一、御神事中忌詞、貞享四年大嘗會の節の通に候。依て御心得被得仰入候事。

十月二十七日

追て別紙一通、從兩傳就御到來被相添候に付、如例次第御傳達可被成候。以上。

一、忌 詞 佛稱中子 寺稱瓦葺 經稱染紙 塔稱阿良

々岐 僧稱髮長 尼稱女髮長 齋稱片膳 死稱奈保留 血

稱阿世 病稱夜須美 哭稱鹽垂 打稱撫 肉稱菌 墓稱塚

穴稱園 堂稱香燃 優婆塞稱角管

一、佛の札、まもり佛の名佛のすがた繪、經等は外へ出す。

一、精進日にも魚類一種にすへ其身は精進不苦。

但右魚類其身きらひにて不喰分。

一、正忌の日外へさがる。

一、參内の醫師等はつけ髪して、裝束布衣上下等を着し、俗名を名乗申管。

一、蘭奢香之事

愚謂。蘭奢二字之儀。是東大二字之隱名而已。此頃看朱子語類一百三十六卷七張。云。王頌謂。胡僧曰。蘭奢。蘭奢乃胡語之譯聲者也。然則不。止。隱名也。

蘭奢香は聖武天皇の御代に渡る無上の伽羅也。聞おもく早く匂不出、匂出るとおもへば消ゆ、消るとおもへば又出る。如此四五度過後は、匂續いかにも匂靜に厚し、外の香に

如此の風無之格別也と云々。

一、古人蘭奢香を九度焼かへし試るに匂不變、十度の時誤て灰の中へ取落し見失と云傳へり。古き香は焼返し試に匂不變。然ども蘭奢の如く數を重ねる事は不可有之と也。

一、慈照院義政公の時、名香三百餘種の中にて古代の名香十一種、重て五十種の香を合せて六十一種を被定。中に蘭奢を隨一と被極。其頃明鼻達人志野三郎左衛門宗信・弟同彌三郎祐憲等十有餘人撰之、其後代々傳之と云。

一、私に曰。寛文中東都に山口焉求と申者有之、香を聞に妙あり。弟子數多有之、同氏右近大夫等も門弟にて、傳受仕の由及承候。拙者幼少の節にて、右近大夫時分の儀は不存候。松田傳左衛門と申人あり。二十年計以前迄存命にて致參會候。是も焉求が門弟、香の傳色々物語共承聞書等いたし置候。傳左は證據正き蘭奢を試候由。古傳の如く無變、一度聞候へば難忘匂格別の由被申聞候。八十歳餘にて二十餘年先死去候。當時誰も正眞を聞覺候者無之、香の傳も絶申候。拙者も折節傳左へ參會候て咄共承候。其友五六人も有之候處、皆古人になり、只今予共々兩人殘申候。蘭奢